

野間宏全集

第二十卷

野間宏全集

第二十卷

筑摩書房

野間宏全集 第二十卷

一九七〇年一月十日第一刷発行

著 者 野間宏

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一一七六五一(代表)
郵便番号一〇一―一九一
振替東京四一二三

本文印刷 暁印刷株式会社
製本 山見製本株式会社

目 次

文学入門

第一章 小説とは何か

第二章 日本の小説

第三章 私の小説の方法

文章入門

一 文章とは何か

二 小説の文章

三 現実生活の表現としての文章

四 自然主義文学の文章

五 記録の世界と小説の世界

六 新感覚派の文章

七 プロレタリア文学の文章

八 昭和文学とマス・コミ

九 戦後文学の文章

十 言葉と文体と文章

若き日の文学探求

第一章 生活記録について

第二章 小説について

第三章 近代文学について

第四章 小説の読み方

第五章 小説の書き方

〈対談〉想像力の解放

解説

〈対談者〉高橋和巳

小林 勝

233 213 203 175
399 379 368 351 327 296 253

文学入門

第一章 小説とは何か

戦争の体験と新しい考え方・見方

私たちはこの二十年の間に非常に大きな経験をした。それは非常に不幸な体験であった。こういう経験を人類がしたということは、これまでには全然なかったことである。

日本人としても、もちろんこういう大事件にぶつかったことは、かつてなかったことだ。過去にもいろいろな大きな戦乱があった。戦国時代などという長い戦乱の時代もあった。この武士と武士が戦う戦国時代というのは非常に長い時代であって、多くの人がその戦いにまぎこまれて、殺されたり、家を焼かれたり、貧乏におそわれのたれ死にをしたりした。そういう時代はその他にも沢山ある。しかしその規模からいっても今度の大戦争をこえるなどというものはない。国民全体がそれにまぎこまれ、関係させられたその規模から考えても、これまでのものとはとても比較することができないほどである。

こういう戦争を体験してきた日本の国民の物の見方、或いは感じ方、さらに自分自身についての考え方、また社会

についての見方、人生——つまり生とか死、そういうことについて——の覚悟というものは非常にか変わった。これまでの日本人とは非常に違ったものがそこに生れてきているといえる。こういう大事件を経たという体験のなかから、戦後はいろいろな違った物の見方や、考え方、感じ方というものが、広く世界にも日本にも出てきた。例えば実存主義の思想などが生みだされ、サルトル（一九〇五年）のようなフランスの新しい文学者の名前が農村の隅々にもつたえられ口にされるようになった。またこれまで日本では全然顔もみられなかった共産党のような前衛党、政治結社が公然と人の前に姿をあらわした。戦後ということがいわれ、アブレ・ゲールという言葉がつくりだされた。民主主義革命がいわれ文化国家の建設が求められた。ところが最近ではこのような戦後の現象はすべて取消されようとしはじめている。一時、逆コース、復古調というような言葉が論文のなかや手紙の挨拶のなかに用いられるようにさえた。日本はアメリカに従属し、そのM S Aを受入れて、戦争を放棄した憲法をもつ日本に、再軍備は着々と進行し防衛力の強化がさらに言われているのである。

このようにとうとうと流れ、うつり行く流れのなかにあるのは、はたしてどこに真実があり、どこに真理があるのか明らかではなくなってくる。へアブレ・ゲールにも満

足はできないが、あの戦争中の軍国主義にかえるというところとは考えただけで全くおそろしいことである。ではどこにほんとうの生き方があるだろうか、と考えたとき、このほんとうの生き方を求める声の方々にあがってくるのである。戦争前の生き方とは違った、新しくしかもはっきりと正しいといえる生き方、そしてただ、波のように次々とうつっていくのではなく、この現代の複雑な時代を真直ぐにつらぬいて発展する新しい生き方を全力をつくしてさがしだそうという要求が多くの人々のうちに起ってくるのは当然のことである。

生き方といっても、そうむずかしく考えなければならぬものではない。道端に咲いている一輪の花を見るとか、事務所においてある何か茶碗とかそういう容器を見るとか、或いは職場で動いている機械を見るとか、そういう時にすでに古い人たち、或いは戦前の人たちと新しい戦後の人たちの間では見方というものが違ってくる。こういうふうな所にはっきりと現われてくるものなのである。

別に生き方というものは各人の日々の生活を離れて、何か天の上高くしまわれているというふうなものではない。漱石は「則天去私」というようなことを考えている。また二葉亭四迷などもいかにして真実をとらえるかということを考え、非常に苦しんで、最後に「仁」といういかなる苦

しみにも左右されないで運を天に任すという、そういうふうな、つまり日々の生活を離れて、何処か天上にあるものとも公平な一つの道をさがしだそうとする。天上にこそどちらにも偏らない公平な立場があるというようにものを考えるのである。しかしそれではいけない。人間の生き方というものは、日々の人間の生活そのものに即して具体的に考えられなければならない。日々の具体的な生活を離れて天を求めるのではなく、日々の具体的な生活のなかをつらぬいてはたらく普遍的なものが見出されなければならないのである。それ故に非常に大きな体験を経た世界のなかから、そういう体験に基いて見出された結論というか、これこそよりどころとしていいというふうな考え方が生みだされてこそ、ほんとうに現代の複雑な生活のなかをつらぬく、普遍的なものが見出されたということができるのである。ところがそのような普遍的な考え方、見方というものは未だはっきりと日本人のうちにひろく深く生みだされてはいないといえる。それでは日本人は今後も自分の生きる道を見出すことができないで、苦しみのうちをさまようほかないのである。

このような戦乱の苦しい体験を経て後に、再びまた同じような大事件に見舞われようとしているにもかかわらず、よりどころにすべき見方、考え方、生き方をたずして苦

しみのうちをさまよってよいだらうか。世界はかつてなかった大転換期に入りつつある。このようななかで私たち日本人は、過去におかしたような戦争のあやまちを再びおかすことは許されない。それ故に本場に今こそ何が新しいのか、何が美なのか、何が真実なのか、どこにしっかりと充実した人生があるのかということを、自分自身で見分けて、そして次にはそれを作りだして行こうという考え方がずつとできていくのである。映画とか、小説とか、詩とか、絵画とか、という芸術に対するこれまでとは非常に違った態度が日本のうちに生れてきているというのはじつに重要なことだといえるのである。

高度成長をとげた日本に軍国主義が前進し、徴兵制が復活すれば戦争が起る。戦争が起ればいたるところに局地戦が何時なんどきすすめられるかも知れない。またこんどは原爆・水爆がつかわれる。……多くの人の人生というのは全く危機のなかにおかれている。このように考えていくと、いま本場に新しくかつ正しく生きていくためにはどうしなければならぬかという問題を、さらに突きつめて考えていかなければならないということが痛切に感じられてくる。もちろん、このような人類の危機、日本民族の危機のなかにおかれながら、人間の日々の生活というものは、やはり毎日オフィスに出て行ったり、工場でハンマーを取

ったり、買物客にはお辞儀をしたりする生活である。それから農民であれば毎日天候を気にして草取りをする、農薬を撒くという生活を続けるのである。またそういうなかで若い人は恋愛をするだろうし、芝居好きな人は芝居をみるだろう。そういう日常の生活をとりぞいては人生というものはない。しかしその恋愛にしても、芝居をみるにしても、何か新しい今までと違ったものがそこに求められてくる。さらにその違ったものを自分の力で、自分の手で生みだそうと考える。そしてこのときひとは絵画とか、映画とか、文学とか、詩とかこういうもののなかに自分の求めるものをさぐるのである。なぜかというところ、この映画とか、詩とか、小説とか——大体これを芸術といっているが、芸術は、人生をつきつめて考えていく上にどうしても欠くことのできない役目をもっているからなのである。

これまで戦前の日本人は家を中心として生きてきたといえる。ところがこの大戦乱と戦後の高度成長よりくる都市化によって、戦争中は若い人たちは兵営に入れられて遠く大陸から南方へ送られ、或いは家庭の人たちも都会から農村へ疎開しなければならなくなり、工場で働いている人たちも山中へ工場を移し、それにつれて深い谷間に移動したりした。戦後は農村人口は一挙に都市に流入し、人々は離れ離れになって生活しなければならなくなっている。この

ような体験からこれまでのように自分の家というものをいつも中心にして考えるだけではまちがって行くという感じが生れてきた。都会の者が農村を考えなければならぬ、農村の者が外国を考えなければならぬ生活、他民族に接して日本を反省しなければならぬ生活が長い間つづいてきた。そのような生活のなかでこれまでのように家を中心にした考えをもってしては、もはやすべてのことが考えきれなくなってきたといつてよい。そういうなかから家は家だけ、外は外だけというような区別した考えではなしに、家と自分と社会との間に何らかそこに筋道——連絡ということ——をつけないければ正しい考えは生れてこないということに気づいてきたのである。

またこれまで見ていたものの位置、花を見ても、どこかの六畳の部屋の花瓶に差してある花を見ても、その生け方がこれまでの何々流というような生け方から変ってきた。そのような型がひとりでに毀れてきた。戦後の混乱また最近の都市化による混乱というふうにいわれるものはここから生れているのである。戦後これまでの古いものは全部こわしてしまふ、古い戦前のものはすべて破壊してしまおうという主張がなされた。この主張は主として文学の面に中心がおかれてなされたが、学問や美術の面でも積極的に発言されたのである。このような運動が起きたというのも、

結局はこういう所に根拠をおいていたといえる。例えば戦後の文学には肉体文学とか戦後文学とか実存主義とかこういういろいろの主張がだされてきた。もちろんそれはそれぞれその根拠をもっている。しかし結局その意味を問いつめていくと、これまでになかった戦争の体験を根底においてそこから物事を考え、出発して行くという点で共通したものがあつたといえる。しかしそういう戦争の体験を本當に整理し、そしてこれをさらに正しくのぼすためには、戦争というものを本當に正しい立場でとらえていくということがなされなければならなかった。そしてさらにそれがこれまで日本が進んできた道、日本の歴史と照し合せてやらなければならなかったのである。

人間は物を見、考えるのに二つの眼を持っているといわれる。その二つの眼というのは何だろうか。それはもちろん科学と芸術である。この二つの眼のほかに人間は物を見る眼というものは何も持っていない。この二つの眼にくりががあれば、そのひとの人生はひとりでくるってくる。この二つの眼を大事にみがかなければならない。しかしこの二つのうち、特にこのような人類と民族の危機に当って、芸術に対する要求は強まってくるといえる。ここには特に考えなければならないものがある。この点を詳しく考えることによって、芸術と人生の關係、芸術と人間の關係をは

つきりとらえることができる。芸術と科学、このどちらも人間がものごとを見、考えるためにあるものである。ものごとを深く見、その本質を考えていくということはこれを学問の言葉でいえば認識ということである。人間はこの芸術と科学、この二つをつかってものごとを認識することによって、ものの真実、真理をとらえることができるのである。人間は朝起きて夜寝るまで、朝起きて歯を磨き、勤めに出て仕事をし、帰って来て寝るという一日の生活のなかで、この芸術と科学の二つの力を同時に働かせてそこに起ったものごとを正しく見、それによっていろいろの判断をしながら生きているのである。

ドストイェフスキー（一八二一—八一年）の『罪と罰』（一八六六年）という小説に例をとってみよう。そのなかにはラスコーリニコフという大学生が金貸しの因業な婆さんを殺すという事件が書かれている。ラスコーリニコフはああいう因業な金貸し婆は虱にも値いしないやつだ、これを殺すということは正しいことであり、自分はそういう殺人人は犯しても恐しくも何ともない。こう考えて殺すのである。ところが斧をマントの下にかくして金貸しの婆さんの所へ行って、斧を打ち下すと、その予想は全く破られてしまう。最初の計画とは違って、そこに入ってきた婆さんの妹のリザベータという非常に信仰深い女まで殺してしまわなければならぬことになる。血潮は着ているものに付き、手は真赤に染まり、質草のはいつているタンスの鍵を奪って錠前の鍵穴に突込もうと思うが、ガタガタ震えて入らない。こういうことになってしまう。私たちがこれを読むと、そのガタガタ震える殺人者のそういう恐怖がその顔付、体付、姿形とともにじつにはつきりと解る。解るだけでなしに、それを生々と感じとることができる。それを読むと私たちは人殺しをしたことがないけれども、人殺しというものの内容が、本質がはつきりととらえられる。しかもそのとらえられ方というものは五官で感じとれるようにとらえられるわけである。形を通じて五官でもその本質が感じとられるという、こういう点に科学との違いがあり、そこに芸術が科学とは違って本当に特別に学問をしない多くの人の心にもはいついて生々と理解される力が生れてくる。

例えば恋愛の問題にしても科学でこの本質をきわめることはできる。これは生理学の問題として、心理学の問題として、恋愛というものは男女がある一定の年齢に達すれば生理的な変化が生れる。従ってそれによって心理的にも変化が起り男女が相求め合う。そういう恋愛の本質というものが明らかにされる。しかし科学書をいかに読もうとも恋愛を体験するということはできない。恋愛を主題にした小説を読めば、たとえその人が恋愛をしたことの無い人間で

あつても、その五官によって自分が恋愛をしているかのうに体験を通じてとらえることができる。このところからまさに科学と芸術の違いがあるのである。この点から考えて見れば、現在特に芸術に対する要求が日本人の中に高まってきているということ、その意味がはつきりと解ると思ふ。

もちろん芸術と科学というものを私は対立して考えようとするものではない。芸術と科学にはこのような違いがあるが、これは何れも人間のなかにある同じ能力を動かすことによつて作りだされるものである。人間のなかの同じ能力、その一つは理性であり、その一つは感性である。人間にそなわっているこの二つの能力、これを働かせるという点からみると、どちらに優劣をつけるなどということとはできない。そして科学と芸術をさらに詳しく調べて見れば、科学は特別に理性を動かす、芸術は感性を動かすというふうなものではない。科学にしても理性と感性を統一して動かさなければ、物事の本質をとらえ真理を追求するということとはできないし、芸術もまた理性と感性を統一して動かしていかなければ、物事の形象的追求、イメージによる追求を深めることはできない。

ただ芸術の場合には、人の五官に見るようにする、五官にとらえられるようにするという点だけ、それだけ余計

な操作を必要とする。そしてここに芸術の特色があるのである。例えば科学者が農村、或いは工場へ調査しに行く。

そしてその工場、或いは農村の状態、その生産工程、労働者・農民の状態などをくわしくしらべてその本質を一カ月かかってとらえることができたとしても、小説家は一カ月をもつてしてはこれを読者の五官に感じとれるようにすることはできない。ひとの五官に感じとれるようにするためには、科学者にとってはそれほど重要でないかも知れない。

その農家の主人の顔の皺がどうだったか、その骨がどんな匂いをしていたかとか、そういうふうな農村生活のあらゆるものまたそれらの人たちの農村のあらゆる生活が作家が体験する。これは実際に体験するのではなくとも、農民の体験を作家はすべてとらえて組立てる操作をしなければならぬ。そういう違いがあるために、一方は三カ月でできるものであつても、一方は一年、或いは一年かかってもできない。五年かかってもできないことがしばしばある。

この点に重要な違いがある。科学と芸術による認識の違いは科学は理性による認識であり、芸術は感性による認識であるというように一応はいうことができるが、この内容をさらにくわしくしらべてみると、ただ科学が理性であり、

芸術が感性だというように考えるのではなしに、どちらも理性と感性を動かす認識ではあるが、芸術のほうがさらに

もう一つ高度な操作を必要とするのである。創作者が読者や見る人の感性（五官）にふれることができるように一歩高度な操作をする。それ故にこれを読んだり見たりする者はそれだけやさしい読み物・見物としてそれに接することができる。この点からも芸術に対する要求は、ひろく一般の人々のなかに増してくるのである。

映画とか、絵画とか、音楽とか、文学とかそういう芸術のなかで、文学は言葉をもって作りだされるものである。

この言葉によってつくられる文学は、大体、詩・小説・劇の三つのジャンル（種目）に分れている。これは古くは叙事詩・抒情詩・劇、こういう形になっていたが、現在は詩・小説・劇というようになっていく。このうち小説、特に今私たちが読んでいる近代小説——例えばスタンダール（一七八三—一八四二年）の『赤と黒』（一八三〇年）、夏目漱石（一八六七—一九一六年）の『明暗』（一九一六〔大正五〕年）、島崎藤村の『破戒』（一九〇六〔明治三九〕年）、ローレンス（一八八五—一九三〇年）の『チャタレイ夫人の恋人』（一九二八年）、こういう小説の起源はいつかといえは今から三百年前である。このような近代小説の第一の特色は何かというと、小説の主人公が私たちと同じ人間だということである。主人公が私たちと同じ平民だということである。それ以前の叙事詩にしても、劇にしても、そこにでてくる人

物は神様か、殿様か、侍、そういうものであって私たちとは非常にかけはなれた人たちであった。

イタリヤにルネッサンスという運動が起って、そのなかから『デカメロン』（一三五三年）という小説が生れてくる。この『デカメロン』という小説のなかで初めて物語の主人公に平民が登場する。そしてそれ以来小説の主人公には平民がえらばれることになり、ここに近代小説が確立するわけである。ボッカチオはこの『デカメロン』という小説を書いて、当時の封建社会をきびしく批判し打ち倒そうと考えていたといえるが、小説によって中世の貴族や、僧侶の腐敗堕落した姿を描きだし、それと対立する当時の平民・市民のはつらつとした姿を対比させたのである。この『デカメロン』によって初めて小説というものは、私たちが今読む小説と同じような形になった。そして非常に親しみやすくなり、あのわれわれと同じ階級の間が舞台に出ていろいろの事件に捲きこまれ、そこで愛し合ったり、復讐したりするということ、こういうふうないき方になったのである。

このことを考えてみても、小説というものがそれ以前の叙事詩とか、詩とか、劇と違っているということがはっきりいえるのである。中世の封建社会を打倒して近代社会を生みだしていくという、そういう大きな運動によって初め

て小説というものは生れてきた。現在の小説というものは、小説のこういう起源を忘れては理解することができない。もちろん『デカメロン』を今読んだならば、その人物の配置とか、その筋の運び、そういう点で例えば『赤と黒』に比べれば十分とのつていえるとはいえない。その面白さというもののにもかたよつていえる点がある。しかし非常に優れた近代小説が生れてきたというのも、結局こういう『デカメロン』とか、それ以後いろいろとでてくる多くの人たちの小説を作りだしていくいろいろな試み、そういうものが集つて、その結果でてきたものである。スタンダールならスタンダールという一人の作家が突然『赤と黒』を生み出したものではない。そしてこの『デカメロン』からも考えられるように、小説というものは、はっきりと社会と時代に対する批判でなければならぬ。そして小説というものが封建社会を批判し打倒する新しい社会のなかから生れてきたのも、小説のもつていえるこの使命があるためであつたと考えることができる。

近代小説のなりたち

ルネッサンス運動は、イタリアから起つて全ヨーロッパに波及した人間解放の大運動である。これによつて近代というものが初めて動きはじめるのである。すでに書いたよ

うにこのルネッサンス運動のなかから『デカメロン』という最初の近代小説が生れたということは、小説というものを考える上においてはどうしても見逃すことができないことである。それまでの人間というものは、大名とか、侍とか、商人とか、農民とか、そういう身分で区別されていた。そして人間のほんとうの内容、その人がどんなに才能があるうと、或いはまたどんなに徳があろうと、その人間の内容・値打ちがみとめられるということがなかった。ところがそういうふうな中世の封建的な考え方がルネッサンス運動で初めて破られた。そして人間はそういう身分から解放されて、人間として、その人間の内容によつてみとめられなければならない、また、お互いに交り合わなければならない、結び合わなければならないということがはつきりと考えられた。その運動のなかからこの『デカメロン』というものも生れてきた。というよりは、『デカメロン』がそういう人間の解放を確立し、戦いつつていくために、その戦いを押進めていくルネッサンス運動の先頭に立った書物であるというふうにも考えられる。すると小説というものはそういう人間解放の戦いの武器であつたといつてよいのである。

このような人間を解放していく、封建制から人間を解放していくという運動のなかで生れてきた小説が『デカメロ

ン』である。それ故これはそれ以前の物語などとは違っている。その主人公は、私たちにとても近い人間・人物であり、私たちがその主人公の身になくなるような人間、そこに自分をおいて考えられる人間である。そしてこの『デカメロン』という小説から、初めて小説というものが人間の本当の内容を追求し、人間を人間としてどこまでも人間性をおおいかくしているもの、また人間性を圧迫しているものを、剥ぎとり、除去去って追求していく、人間追求の道というものが生れてきたのである。

それまでの叙事詩とか、物語とか、劇というものを読んでみても、そこにはいろいろな美德とか、武勲とか、騎士道とか、或いは忠節とか、そういうふうな封建道徳や、或いは神に対する讚美などを中心にした話はあるが、人間を本当に人間そのものとして追求していこうという考えはなかった。

人間といっても、もちろん読者である私たちと変りのない、街を歩いており、そして働いて生活している市民であり、平民である。そしてその文章の言葉も、街を歩き、働いて生きている人たちが使っている口語であった。

それまでは文学というものは、大体ラテン語で一般市民には縁遠い言葉で書かれていた。そしてそれを読む者は、ラテン語の読める特権階級や僧侶が中心であった。それ故

それは広く読まれるということとはなかった。ところがこの『デカメロン』によって、初めて本当に広く読まれる小説というものが生れたといえるのである。

このボッカチオ（一三三—一三七五年）の『デカメロン』は、記録にもこのっているが当時ベストが流行し、多くの者が倒れていく、そういうなかで、それを逃れて町端れにベストを避ける人たちが、いろいろな面白い話をしてそのベストの難を避けるという、こういう構想の下に話される話として作られているわけである。その第一話・第二話はいずれもその当時の封建的な類魔——わるだくみをしたり殺人をしたりして、大きな罪を犯してきたものが、死ぬ間際の懺悔のときにも大嘘をついて、しかもその男が僧侶によって聖徒として認められてまつられるというふうな封建的な類魔を暴露している。そしてその話が次第に進んでいくにつれてそういう封建的な徳に對立して、本当に人間の能力をもってそれらとたたかいそれらを剥ぎとり、そして勝利を収めていく、そういう人たちが描かれ、人間の能力に対する讚美が述べられる。『デカメロン』がでるまではこのような形で人間が追求されるというようなことは全くなかったことである。

『デカメロン』によって初めて人間に対する追求のいとぐちが開かれてから、人間追求という所に小説の任務がある

ということが次第に明らかにされ、遂にそれが多くの人々にはつきりと認められるようになったのである。さらにまた小説は、当時発達した自然科学による発明とか、発見と同じほどの価値を持つものであるとされたのである。またついでには、小説は自分の生きる道を明らかにしていく人間の自己認識の方法であるというふうに認められるまでに至るわけである。

科学のはたらき・芸術のはたらき

例えばここにジョンがいるとする。ジョンは動物である。科学ではこのジョンをしらべる。たまとかポチとかジョンに似たものをいろいろ調査し、たまとジョンの違いは何か、ジョンとポチの似ているところはどこかとしらべていく。するとジョンはたまとは違っている。そしてポチとは同一の種族であるということがわかっていく。ジョンとポチとはジョンは毛並は茶色でポチは毛並は白、ジョンは大きくポチは小さい。このようにジョンとポチは毛並、大きさは違っているが、これを解剖して歯の数、内臓の状態、乳房、四肢、その性質などをしらべてみると、その本質は同じことがわかる。また一方たまとジョンをくらべてみると、一方はひつかく爪があり鼠を取り木登りするが、ジョンは爪はあるが木登りできないし鼠はとらないという違いがある。

しかしこのたまとジョンにも共通した性質がある。それは子供に乳をのませて大きくそだてるという性質である。これは猿にも人間にも共通した本質である。このようにジョンを解剖し、実験をつづけて、ジョンという具体的な個体の内容をしらべて行くと、ジョンは動物である」「ジョンは動物のうち哺乳動物である」というジョンの内容がくわしく判明していく。ジョンの内容はいよいよ正確にとらえられ、ジョンの本質が見出されていく。このように「ジョンは動物である」とか「ジョンは哺乳動物である」などと考えていくことを判断というが、判断をつみかさねていって推論をみちびき、普遍的な真理に到達していくのが、科学なのである。ジョンとかたまとなどという個別的な一つ一つのものを、動物とか哺乳動物などという普遍的な概念でとらえていって、その内容を明らかにしていくというところにこの科学による認識の特色がある。このようなやり方で人間はジョンというものの本当の内容を知り、ジョンに対してはどうすればよいか、或いは人間とジョンとはどういう関係にあるのかというふうなことまではつきり知ることができるのである。

科学はいま明らかにしたように概念による判断によって物の本質をとらえていく。ところが芸術のほうは科学とは違って物事をその姿、形をとらえていくことによってその